

『ヴェニスの商人』におけるアントーニオの役割

兵 頭 晴 子

この劇の冒頭にあるアントーニオのせりふは、In sooth I know not why I am so sad, / It wearies me, you say it wearies you;... (まったくのところ分からない、どうしてこう気がめいるのか。くさくさする。お蔭できみたちもくさくさするっていうんだらう?) であり、劇の終りまぎわのせりふは、一応、祝祭的結末を感じさせるかのような、Sweet lady, you have given me life and living; / For here I read for certain that my ships / Are safely come to road. (美しい奥さん、あなたのお蔭で命も財産も取り戻しました。ここに確かに書いてあります。船はみな無事に港に入ったって。) と言っているが、そのせりふのわずか7行前ではI am dumb! (ぼくはもう啞だ) と言っている。アントーニオは劇中に6回登場する(1幕1場, 1幕3場, 2幕6場, 3幕3場, 4幕1場, 5幕1場)。彼の手紙が読みあげられる部分(3幕2場)も加えれば7回の登場となる。グレイシアノーを船に乗せるためにさがしに来てすぐ退場してしまう2幕6場を除くと、6つの場面に共通して見られるせりふがある。それは、バサーニオに対する愛情を示すせりふである。また、Sadで始まりdumbで終わることから想像できるように、彼の多くのせりふにさびしさやあきらめの雰囲気漂う。ただし、バサーニオの恋を応援するときには、身体も(1幕3場148行)、魂も(5幕1場251-253行)かたに入れたり、また、シャイロックがWhy look you how you storm! (おやおやこれは、またえらい権幕だ!) と驚くほど激しい感情を示す。三つの恋が進行してゆく、浮き浮きした若者たちの世界の中であって、暗い雰囲気を漂わせているのは、シャイロックの他には、このアントーニオだけである。ベルモントで三組の結婚がめでたくまとまっている中で、アントーニオがただ一人、ポツンと取り残されている演出はよく見られる。劇の進行に深くかかわりながら、しかも、彼は、部外者のように見える。彼は主要な人物の一人でありながら、喜劇の最終目的、祝祭、結婚の型から締め出されている。彼の存在は劇の中でどのような意味があるのか。個々のせりふに注目しつつ考えてゆく。

1. 愛情の表現

アントーニオのバサーニオに対する愛情の表現をとりあげてみよう。劇が始まってまもない、1幕1場135-9行において、すでに

I pray you good Bassanio let me know it,
And it stands as you yourself still do,
Within the eye of honour, be assured

My purse, my person, my extremest means
Lie all unlock'd to your occasions.

ぜひとも、バサーニオー打ち明けてくれたまえ。不名誉なことでさえなければ、そりゃきみのことだ、間違いないが、安心したまえ、ぼくの財布、ぼくの身柄、最後の一文まできみのために錠をはずしてある。

アントーニオーに借りた金を使い果たして贅沢三昧をしたバサーニオーは、借金を返す方法を教えてほしいとアントーニオーに頼む。アントーニオーはさらに借財を申込みたいのではないかと察知してこのように言ったのであろう。以前の借金の返済もせずに、再び厚かましくも借財を申し入れるバサーニオー。それに対してあまりにも寛大なアントーニオー。このせりふ一つとってみても、おそらくアントーニオーはバサーニオーよりもかなり年長で、しかもバサーニオーに深い愛情をそそいでいると考えられる。またバサーニオーはアントーニオーに依存しているようだ。

Thou know'st that all my fortunes are at sea,
Neither have I money, nor commodity
To raise a present sum, therefore go forth
Try what my credit can in Venice do,—
That shall be rack'd even to the uttermost
To furnish thee to Belmont to fair Portia
Go presently inquire (and so will I) where money is, and I no queastion make
To have it of my trust, or for my sake.

(Ⅲ, i, 177—185)

いいかい、ぼくの全財産は海の上だ。すぐ金が要ると言ったって、現金がない、商品もない。だから行ってみよう。ぼくの信用がこのヴェニスでどのくらい利くかやってみよう。無理して利くだけ利かせるんだ、ぎりぎりまでね、きみをベルモントへ、美しいポーシアのそこへ送るためだもの。さあすぐ探すんだ、ぼくも探すよ、金の出どころを。間違いなしの大丈夫、できるよ、ぼくの信用で。でなきゃぼくの人柄で。

アントーニオーは借金してまで、バサーニオーに用立てようとしている。このせりふは、文字だけを追って読むと軽快な感じもするが、BBCのシェイクスピア劇の演出では、この場面のアントーニオーは、悲しげな顔をしている。こうして1幕3場では、自分の命とひきかえに借金をする、つまり期限内に返却できないときは肉1ポンドを切り取って良いという証書に判を押す。

3幕2場では、バサーニオーが無事、正しい箱を引きあてて一同が喜びにひたる中へ、アントーニオーの手紙が届く。

Sweet Bassanio, my ships have all miscarried, my creditors grow cruel, my estate is very low, my bond to the Jew is forfeit, and (since in paying it, it is impossible I should live), all debts are cleared between you and I, If I might but see you at my death: notwithstanding,

(309)

use your pleasure,— if your love do not persuade you to come, let not my letter.

(Ⅲ, ii, 314—20)

バサーニオー、ぼくの船はみな難破してしまった、債権者は苛酷になるばかり、ぼくの立場はみじめの極、ジューとの証文も期限が切れた。そしてそれを支払えばぼくは生きていられないのだから、きみとぼくの間は債務はすべて消えるが、それにつけても死ぬ前に1目会いたい。だがそれもきみの気持ち次第で、もし気が進まなければこなくていい、この手紙にこだわらないでくれ。

と控え目に、死ぬ前の再会を望んでいる。

この手紙のわずか数行後、場面は展開して、ヴェニスではアントーニオーがシャイロックに頼みごとをしようとしているが、シャイロックは証文通りにやるのだと、頑として耳を貸さない。あきらめたアントーニオーは最後にこう言う。

pray God Bassanio come

To see me pay his debt, and then I care not.

(Ⅲ, iii, 35—6)

ああバサーニオー、きみが間に合ってぼくの借りの返しかたを見届けてくれさえしたらそれで満足だよ。

バサーニオーはヴェニスにかけつけるが、法廷の場面でなすすべもなく、いよいよ、証文通りの事が行われそうになったとき、アントーニオーは次のように言う。

Commend me to your honourable wife,
Tell her the process of Antonio's end,
Say how I lov'd you, speak me fair in death:
And when the tale is told, bid her be judge
Whether Bassanio had not once a love:
Repent but you that you shall lose your friend
And he repents not that he pays your debt,
For if the Jew do cut but deep enough,
I'll pay it instantly with all my heart.

(Ⅵ, i, 269—277)

奥さんによろしくいってくれ。

アントーニオーの最期のもようを伝えてくれ。

どんなにぼくがきみを愛していたかもね。死んだらぼくのはよくいうんだよ。そして十分話した上で、奥さんの判断を聞いてくれ、バサーニオーにも本当の友達があったといえるかどうか。

友達を失うことを少しでも嘆いてくれれば、その友達はきみの負債を支払うことなど嘆きやしない。だってあのジューがこの胸を十分深く突き刺してくれさえすりゃ、すぐに心底からきみの負債を返すことになるんだからな。

今までのつつましい願いに比べると、かなりはっきりとアントーニオーがバサーニオーにしてほしい事を要求するところがある。それは、ポーシャの扮する博士に、バサーニオーの婚約指輪を与えてほしいと言うところである。ここは、バサーニオーの妻、ポーシャの気持を無視してでも、アントーニオーの強い意志を通そうとする珍しい部分である。

My lord Bassanio, let him have the ring,
Let his deservings and my love withal
Be valued 'gainst your wife's commandment.

(IV, i, 445-7)

おいバサーニオー、その指輪を上げてくれ。あのかたのやってくれたこと、それにぼくの友情のことも考えてくれよ。奥さんのいいつけもあるだろうが。

この指輪をめぐってポーシャがきびしくバサーニオーを追求すると、アントーニオーは自分の責を強く感じ、この事態を救うために、今度は自分の魂をかたにしようと言う。

I once lend my body for his wealth,
Which but for him that has your husband's ring
Had quite miscarried. I dare be bound again,
My soul upon the forfeit, that your lord
Will never more break faith advisedly.

(V, i, 249-53)

ぼくは一度はこのからだをかたにしました。この男の仕合せのために。そして御主人から指輪を貰ったあの人がいなかったら、ぼくはもうなくなっていたはずです。もう一度今度は魂をぼくはかけましょう。あなたのこの人はもう再び故意に誓いを破るなどということは決してしません。

劇中に出番も比較的少なく、またアントーニオーの決して多くないせりふの中に、たくさん、バサーニオーへの愛が語られている。二人の間には、単なる友情を越えた、特別な愛情が感じられる。

1幕1場でバサーニオーに出会ったまもなく、アントーニオーは、「きょう話すと約束した女性」、バサーニオーが「ひそかにお参りしようと決意した相手」の話を催促する。つまり、バサーニオーには恋する人があらわれ、やがて彼はアントーニオーのもとを去ってゆくことをアントーニオーは劇のはじめから知っているのだ。劇の冒頭の「どうしてこう気がめいるのか」の理由は、ここにある。喜劇では愛しあう男性と女性が結ばれる。アントーニオーの愛は祝祭喜劇の中では不毛の愛であり、はじめから彼はポーシャに譲らねばならないことを知っている。混乱と紛争のただ中ではいくら雄弁でもあったアントーニオーだが、愛と調和の音楽が鳴り響く第5幕では、307行中、彼のせりふはわずかに12行にすぎない。結婚の祝祭の中における彼の地位は、この行数に比例しているといえる。

次に、引用に注目してみると、それぞれ異なる場面設定の中のせりふでありながら、奇妙に一致した共通点が見られる。一つ目は自分が死ぬことが、すなわちバサーニオーの負債を棒引きにして

しまうのであるから、自分は喜んで死んでゆくということ、二つ目は、死の前にバサーニオーに一目会いたいということ、そして三つ目は、バサーニオーをベルモントにいるポーシャのもとへ送り出すために命を抵当にしたこと、そして、ポーシャとバサーニオーを仲直りさせるために命よりも大切な魂を抵当に入れたこと。つまりアントーニオーはバサーニオーの幸福のために一身を投げ打っている。

死ぬほど好きな人に直接自分の気持を打ちあけることができず、しかも他の人物がその人と結ばれる手助けをする報われぬ恋、他の人物の手助けさえする自分の立場を思い胸のはりさける思い…この型はシラノ・ド・ベルジュラックを想い出させる。また、道化または道化的人物によく見られる「報われぬ恋」を想いおこさせる。その辛い気持のほんのわずかな慰めとして、ただ顔が見たい、そして死にたい、と繰り返し、繰り返し言い続けている。

2. 自己の役割についての認識

I hold the world but as the world Gratiano,
A stage, where every man must play a part,
And mine is a sad one.

(I, i, 77-9)

世の中は世の中、ただそれだけだと思っているよ、グレイシアノー——つまり舞台さ、誰でも何かの役をつとめなきゃならない、そしてぼくのはしょぼくれた役さ。

I am a tainted wether of the flock,
Meetest for death,—the weakest kind of fruit
Drops earliest to the ground, and so let me;

(IV, i, 114-6)

ぼくは群れの中の病める羊さ、殺されるにはもってこいだ。木の実だって一番しなびたのから真先に地面に落ちる、ぼくもそうさせてくれ。

1幕では、愛するバサーニオーがポーシャのもとへ去ってゆく悲しみ、それでも彼を愛すればこそ、彼の願いを実現させるよう助力をおしまないではいられない自分の立場を憂えている。4幕では、若い恋人たちが結ばれるために、シャイロックに対する生贄となる自分、年上の者は若者に便宜のみ与えて、その後去ってゆかねばならないことを自己憐憫の目で眺めているようだ。

喜劇の構造において若者の親の世代の老人は、若者が結婚できるよう、屈服または妥協させられたり、財産をまきあげられたりすることが多い。『ヴェニスの商人』ではシャイロックとともにアントーニオーも、この老人の役をになっているようにも思われる。

また喜劇は反喜劇的な社会や雰囲気⁽¹⁾で始まり喜劇の発展とともにそれらは解消されてゆく。反喜劇的な社会とは、ここではシャイロックの証文を認め、正当化する法律、反喜劇的な雰囲気とは、冒頭のアントーニオーの憂うつ、続く1幕2場のポーシャの憂うつ、By my troth Nerissa, my little body is awearry of this great world. (本当にネリッサ、あたしの小さなからだはこの大きな世界に飽き飽きしちゃった)がそうである。アントーニオーはweary、ポーシャはawearryと似たよう

な単語で自分の心境を表している。アントーニオーは去ってゆくバサーニオーを思い、ポーシャは箱選びによりどんな阿呆や色の黒い外国人と結婚させられることになるかもしれないという強い不安を感じて、それぞれ weary や aweary を用いているのであろう。

アントーニオーは諦めて、バサーニオーとポーシャの恋を応援しつつも一步離れてそのなりゆきを見守る、観客に近い位置におり、観客に近い視点を持っている。また、報われぬ恋をしている故に道化的であり、恋愛、結婚という喜劇の主たる流れの外側に位置している。若者の結婚のために財産を与える（またはまきあげられる）老人の役割をも果たしている。もちろん最終的にはポーシャの助力は不可欠であるが、大きな流れの中で、彼は外枠にいる人間でありながら、枠の中に入る人たちの混乱をしずめ、上手にとりまとめ、その仕事すすめば舞台から退場するしかない人物である。道化役のランスロット・ゴボーですら、シャイロックの家から逃げ出しバサーニオーの家に仕えることになったので新しいベルモントの社会に組み入れられたのだが、シャイロックとならんで、アントーニオーは劇の世界から去って行く人物である。

3. アントーニオーとシャイロック

アントーニオーは慈悲深く寛大な紳士であるのに、シャイロックに出会ったとたん紳士でなくなってしまふ。同時に、悲しみや諦めで打ち沈んでいた時と比べて、一気にエネルギーになり、悪口雑言を吐く。たとえば、シャイロックに唾をかけたり、足蹴にしたことを言われると、また何度でも唾を吐き足蹴にするという。また4幕でも、ユダヤ人なんかは何を言っても無駄だと言う。これは当時のイギリスのユダヤ人に対する根強い偏見を表しているのだろうか。英国の劇の中には、他国人のやり方を嘲笑して楽しむ笑いが時折見受けられるが、これもその一つであろうか。

ポーシャも色の黒い王子をひどく嫌がっていたようであるし、ランスロット・ゴボーもジェンカにずい分ひどいことを言っている。つまりユダヤ人の娘であるので呪われるのだから、魂が救われたければ、シャイロックの子供でないことを、つまり母親がユダヤ人シャイロックとは別の人の間にもうけた子供であると望んだ方が良く、などと言う。あまりにも完璧すぎるアントーニオーでは、人間味がうすれるので、観客の同情を得にくいのではないか。それでアントーニオーにもこのような一面を与えたのかもしれない。劇上演当時は、ロベスの女王暗殺未遂事件の記憶も生々しい時期であり、この、偏見というあまり思わしくないものをもつ、アントーニオー、ランスロット、ポーシャに、観客は自分達とより近い視点を感じ、劇の中の世界に入りやすく感じたのではないか。つまり、観客の視点に近いアントーニオーの地位をより確かなものにするために、このような要素をつけ加えたのかもしれない。

注

テキストは John Russel Brown, *The Merchant of Venice*, the Arden Shakespeare, (Routledge, 1994) を用いた。

日本語訳は、木下順二訳、『シェイクスピアⅣ、ヴェニス商人』（講談社、1989）用いた。

- (1) ノースロップ・フライ著、石原孝哉、市川仁訳、『シェイクスピア喜劇とロマンスの発展』（三修社、1987）p.111。